

給食と幼稚園

大和郷幼稚園 坂内 みつ

昨年と今年だけの極めて貧しい経験であります、十二月から三月までの冬期中、お辨當の時に味噌汁を一椀つゝ與へました。其理由は、過般幼児のお辨當のおかずを調べていたゞいた處、肉類、卵其他動物性のものが多く、野菜が少ないので、もう少し野菜を食へさせ度い事と、寒い時

せて暖かい汁を吸はせ度いゞ飯を温める装置が不完全な爲め、こいふ單純な考へに過ぎないのであります。けれども榮養の事は充分に考へて、毎日の献立をば香川先生にお願ひしてカロリーを計算していたゞき、汁のだしにもジミール等を使用して注意は怠りません。其結果としては大したものではなく、家でも味噌汁を食べるやうになつたさか、人蔘を食べるやうになつたさかいかいふ位ですが、一般に喜んでよく食べる事は事實であります。味噌汁を作る手数をかける位なら、いつそ給食して貰ひ度いこいふ希望でありました、そこで給食について次のやうに考へて見ました。

給食の目的

一、科學的な立場 榮養學上から考へられた獻立により、年齢相當な質と分量を與へ偏食を矯正して理想的な健康體の子供とする事

二、社會的の立場 両親が無教育の爲、或は貧困の爲め又は母親が忙はしい職業に就て居る爲めに、お辨當の世話が届かず、有り合せの粗末なおかずを入れて間に合せねばならぬ子供、毎日ノ、パンばかり持たせられる子供等に對し榮養食を與へて健康兒を多くし健全な國家社會をつくる爲

託兒所や保育園で實施されて居る給食は主として第二の目的に添はんが爲めであります。託兒所では當然給食すべきもので、身體方面の養護の爲大に力を入れなければならぬ事だと思ひます。所が現在の私の園では其必要を認めません、寧ろ弊害があると思ひます。

辨當は母親の手で

實際にお辨當をつくる事は母親の重荷であります。毎日

毎日頭を悩まして子供の好むものを、榮養價のあるものを、分量も丁度よいやうにこ、一方には經濟上の事も考へねばなりません、自分の生活費から割り出してそれ相當にしなれば續きません。又同じ經費でも材料の選び方によつて榮養價に大差があります。假令ば日の丸辨當にしても、白米に梅干を入れただけでは榮養分が足りません、之と同じ經費でも胚芽米に「アミ」の佃煮をご飯の真中に入れて日の丸辨當をつくれれば、榮養は満點である。或醫學博士の方は申して居られます。其他いくらもさうした例はありません。う、けれども榮養價が高いから毎日く同じものでは食慾が無くなつてしまひます。考への深い人程むづかしいのであります。其むづかしい事を母親が一生懸命に誠意をこめて子供の爲めにつくる處が貴いので、子供も亦感謝していたゞく事が出来るのであります。或女の子でしたがお辨當の相圖がある。第一に早く用意を整へキチン。机に向つてニコくして居りますが、おそい人を待つ間時々おかす入れの蓋を取つて見て、「今日はお卯さ小聲でいつてはニコリします。其顔の嬉しさうな事、其時の其子供の心は神に近いものだと思ひます。又稀には「先生今日のお辨當はお母さんがつくつて下さつたの。嬉しいな」さわさわ先生に話して喜びを分たうとする子供さんもあります。喜んで食べてこそ榮養分が吸収されるのであります。如何

に多くの榮養分を含んだ食物を口に入れてもいやくながら呑み下したのでは吸収される處は極めて少いのであります。普通の家庭ならば子供の辨當をつくる暇がない。いふ筈はありません。不幸にしてつくつてやらぬ母親は給食して貰う事を感謝するに相違ありません。心の内では子供に詫びて居る事でありませう。給食する方でも其氣持を察して親切に考へた獻立によつて親切に取扱ふべきだと思ひます。數が多いからこゝ機械的になつてはなりません、お辨當は單に身體の糧であるばかりでなく、同時に心の糧であります。お辨當はさうしても母親の手でつくらなければなりません、此意味に於て幼稚園では給食する必要がないと思ひます。昔の母親は子供の食物の事は申すに及ばず、シャツ一枚でも人手にかけず夜の目も合さず自分の身を顧る暇なく子供の爲めに盡されたのであります。今は衣服類すべてデパートに行けばすぐ間に合ふので、金さへあれば事缺かぬやうになつたので心の入れ方が足らなくなつた爲め、子供も亦感謝の念が薄くなつたのではないかとさへ思はれます。其裁縫する時間、つぎものをする時間は現今では何に使用されて居るのでありませう。子供の學校參觀等にも使はれませうが、幸に母親自身の修養の爲めに又社會奉仕の爲めに使はれるならば此上ない幸福であります。

若し幼稚園に於ける給食が第一の目的にのみ依る。とする

ならば、第二の目的を考慮せず、純粹に科學の上に立脚して行はれて然るべきものと思ひます。けれども實際にはな

か、理論通りには行かぬと思ひます。子供の食欲には大にむらがあつて或時は驚くほど大食かと思ふ、或時は極めて少食で、別に空腹を感じないしおなかもこはさないのは、自然の要求かと思ひます。おひるのお辨當の時でも其前の運動等の加減で食欲の出ない時もあります、つけられた分は残してならないといふのは無理な注文で、實際行はれません。統計を取つて見ても完全な結果は得られないのであります。又持つて生れた體質によつて要求するものが違ひます。それを同一に取扱つて同じ質のものを食べさせる事は感心出来ません、それも三食を通してならば結果が現はれませうが、一日に一食だけが科學的に與へられても他の二食が科學的になつて居らねば完全な結果を見る事は出来ません。又家庭に於ても獻立に困るのであります、幼稚園でいたゞくお晝の獻立が知れて居るにしても分量まではつきりわかるわけには行かず、子供が一人ならば何さか出来ませうが幾人かの子供がお晝に別々のものをいたゞくすれば、夕食の獻立をさうしたらよいかむづかしい事になります。若し又給食された獻立がわからずに夕食をすれば、肉が重つたり野菜が多くなり過ぎたり、却つて榮養的でなくなる憂があります。科學的に結果を出す事は至難な

事でありませう。

榮養不良のために病氣になる子供もあれば、榮養過多の爲めに短命に終る人も無いではありませんが、榮養不良といつても榮養を採らなかつたといふよりは、食べても食へても榮養を吸収する事が出来ない爲めに不良に陥つた例の方が多いのであつて、東西古今時と所によつて食物の種類が異り調理の方法も異なるのでありますが、大した不都合なく相當に成長するものであります、美食する人、大食する人必ずしも良い體格でなく、必ずしも體力が強いといふでもありません、神の御旨の宏大なのに敬服する外ありません。けれども幼児は成長して行かねばならぬのであります、原料を用ひず建築するわけに行きません。骨となり肉となり血となる原料として食物を採らねばなりません。其子供の體質を知り氣質を知り適當な食物を與へるのは母親において他にありません。食物の事だけは人に委ねる事の出ない母親の義務であります。不幸にして給食を受けねばならぬ不幸な子供がありました時は、母親になつた心で誠意をつくして考へていたゞき度い、機械的に陥らないやうにしていたゞきたいと希望して已まない次第であります。